

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.25 No.10 October 2024

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University



10

CONTENTS

・巻頭言

解釈学的循環

／井上 昭洋 1

・文脈で読む「身上さとし」(15)

明治 22 年 2 月～3 月

／深谷 耕治 2

・ライシテと天理教のフランス布教 (37)

21 世紀のライシテと天理教のフランス布教 ⑦

／藤原 理人 3

・英語文献にみる天理教 (6)

D.C. グリーンの『Tenrikyo』(2)

／尾上 貴行 4

・音のちから—中国古代の人と音楽 (22)

出土楽器が語る音の世界—漢代雑技の音響効果—

／中 純子 5

・ヴァチカン便り (70) (最終回)

エキュメニズム(教会一致運動)とカソリック教会

／山口 英雄 6

・2024 年度公開教学講座要旨:『逸話篇』に学ぶ (10)

第 2 講: 114 「よう苦労して来た」

／澤井 真 7

・おやさと研究所ニュース 8

比較思想学会第 51 回大会が本学で開催／天理台湾学会第 33 回研究大会が本学で開催／第 6 回 EASSR (東アジア宗教科学研究会) 年次大会に参加／International Conference on Indian Diaspora in Asia (アジアにおける印僑についての国際会議)に参加

巻頭言

解釈学的循環

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

解釈学は、古来、古典や聖書の解釈、法の解釈の領域で発達してきたが、現代の解釈学は、テキストにどのように接するか、テキストをどのように解釈するかについて考える学問と言える。テキストとは言うまでもなく text の日本語表記(カタカナ英語)である。英語の text は日常用語としてはテキストと記すが、文芸批評や人文・社会科学の分野では「テキスト」と表記することが多い。テキストであれば、文章や文献、教科書(textbook)を意味するが、「テキスト」は文字に書かれたあらゆる言語的プロダクト(言語作品)を意味し、さらに敷衍して、解釈の対象となりうる文化的産物までも含む。人間の作ったモノ、言説や行動様式もテキストとして解釈される。

ところで、現代の解釈学の基本的な問題として提唱されてきたのが「解釈学的循環(Hermeneutic Circle)」である。テキスト解釈においては、全体の意味を把握することで部分の意味を理解することができ、部分を理解することで全体の意味理解が深まる。この解釈における「全体と部分の循環的な相互作用」を指して「解釈学的循環」と呼ぶ。この古くから知られている解釈における循環作用は、「全体と部分」の構成を組み替えて捉えられるようになっていく。例えば、リクールの「説明」と「理解」との循環、ガダマーの「解釈する者」と「解釈されるもの(テキスト)」との循環は、いずれも解釈の必然的な構造として循環的な相互作用を唱えるものである。

「説明」のモデルを自然科学ではなく記号論に求めたリクールは、「説明」とはテキストの構造を表出させることであると言う。構造言語学といった客観的な科学によってテキストの意味(sense)を露わにすることが「説明」なのだ。一方、「理解」とはテキストが実のところ言及しているもの(non-ostensive reference)を明らかにすることで

にするのが「説明」であり、テキストが何について語っているのかを明らかにするのが「理解」であると言い換えても良い。そして、両者が止揚されたところに「解釈」が立ち上がる、もしくは両者は「解釈」によって統合される。このように「説明」と「理解」は解釈学的循環を構成するという。

一方、ガダマーはテキストを解釈する際に「先入見」が必要であると説く。解釈者は「先入見」なしにテキストを解釈することはできないのである。彼は「先入見」にポジティブな意味を見出し、テキスト解釈のなかで「先入見」がたえず修正されていくプロセス、すなわちテキストと解釈者の間でなされる相互の働きかけを解釈学的循環と捉えた。それはまた、解釈者の先入見の地平がテキストの歴史的地平と融合することであるとし、それを「地平融合」という言葉で表した。「地平融合」は、テキストと解釈者との間でなされる問いと答えの往復運動であり、「対話」なのである。

これまで巻頭言では、人類学や宗教研究における内と外(インサイダー/アウトサイダー)の問題や、人類学における「対話」概念、フィールドワークにおける理解のあり方について考えてきた。これらの問題は解釈学的循環の枠組みで捉え直すことができる。しかし、解釈学的循環は解釈の原理であって、実用的な方法論ではない。それは、社会科学におけるナイーブな客観主義や実証主義に警鐘を鳴らしてくれるが、具体的な研究においてどのようにして“妥当”な解釈を実現させるのかを示してくれない。解釈人類学者ギアーツに倣えば、解釈は本質的に論争に耐えうれば良い(essentially contestable)ということになるが、そうであるとすれば、論争のなかで解釈を提示し続けることによりその解釈だけでなく論争そのものも洗練させていくことが、私たちにできることになる。